手のひらサイズの
妖精だってしたいんです

一

ブラック企業の奴隷社員として働きつくし過労死。

来世はまともな企業に就職したいものだと、死に際にささやかに願ったものだが、目が覚めると妖精になっていた。

愛読していたファンタジー漫画の登場人物だ。

女から男に性別が変わりつつも「フィナ」の名前も、手のひらサイズも、勇者の尻を叩く役回りも漫画のまま。

勇者のお供、というか、勇者と妖精は名コンビ。

今やフィナは男になってしまったものの、そのやりとりは「夫婦漫才」と冷やかされるほど恒例。

まあ、漫才のようになってしまう原因は、主に勇者こと、ロイドのふざけた設定にあったが。

魔王打倒を志し、人人に希望と勇気を与える象徴にあるまじき、ぽんこつ駄目人間。

誰も歯が立たなかった「伝説の剣」を抜くことができた、選ばし者なれど、その動機からして不純。

借金まみれで、あろうことか「伝説の剣」を質屋に持っていくためだったという。

質屋に行きつく前に取りおさえたとはいえ、あらためて担うべき使命を教えると「いやいやいや！だったら俺はいらないから、あんた買って！」と断固拒否。

伝説の剣を抜いた者しか、その力を引きだせないし、魔王を葬ることもできない。

丁寧に説明するも「魔物に殺される―！こいつらに殺されにいかされるー！」と大泣きして地面をのたうち、断末魔のような叫びをあげる有様。

とことん情けなく、ぶざまに悲劇の被害者ぶるのに「伝説の剣をもどそうか」と見限りそうなところ。

説得に当たった神官は寛容でありつつ、頭が切れたからに、駄々をこねる

ロイドをそそのかした。

まずは肩代わりして、借金から解放。

だけでは、恩義もくそもなく「馬鹿なオヒトヨシめ！」ととんずらしそうなので「遊べる余裕があるほど、旅の資金の仕送りをするから」と約束。

さらに女ズキなのに、つけいって「勇者になったら、モテるよ？」と耳打ち。

とどめとして、村一の美女に「なんて、かっこいいの！魔王を倒したら結婚しましょ！」とおだてさせて。

「よっしゃあああ！

魔王を倒すまでモテまくってやりまくって、最後はペティちゃんとゴールインだぜえ！」

まんまと乗せられたロイドと、お目付け役の魔法使い、剣士、忍（全員男）の冒険がやっとスタートしたものの、順風満帆なわけがなく。

ロイドの無能ぶり、だらしなさは、想像以上だった。

戦闘では腰を抜かして「おおおお、お前ら、さっさとやっつけろよ！」と泣きながらガードしまくり。

村や町につけば、女の尻を追っかけまわし、トラブル起こしまくり。

モテないのは自業自得なれど「神官の嘘つき！」とふてくされて、隙あらば逃亡しまくり。

お目付け役の仲間は「よく匙を投げないものだ」と同情されまくり。

比例して勇者の悪評が立ちまくり。

ただ、そんな落ちこぼれ勇者の尻拭いに、日々追われる当の仲間たちは、決してロイドを非難せず、愚痴も吐かず。

人間性に問題ありまくりだとしても、紛うことなき選ばれし者だと確信してのこと。

たとえば、思いがけず強敵にでくわしたり、敵の術中や罠にかかるなどピンチになったとき。

「死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ！」と盾に隠れる勇者を庇いながら、健闘するも

仲間全員がバタンキュー。

残された勇者は体力魔力マックスなれど「道半ばで無念！」と早早、仲間は諦めてしまい。

が、すこし目を放した、その一瞬に地を揺るがす轟音が。

顔を上げると、仲間全員が必殺技を使っても、屁でもなさそうだった魔物がきれいさっぱり消失。

剣を握ったまま、突っ伏して倒れていた勇者は、相討ちしたように見えたものの、ほぼダメージなしの無傷。

なんてことが、たまにあるから、民衆は「へたれ泣き虫勇者」と馬鹿にするも、仲間は監視の目を光らせつつ、一目置いている。

なかでも、ロイドを心から慕っているのが、俺こと、妖精のフィナ。

ロイドとの出会いは、絶望的な渦中でのこと。
魔王の命を受けて、獰猛な鬼のような魔物がフィナの一族に襲いかかったときだ。

仲間たちが魔物の牙に裂かれ、噛みちぎられていくなか、母の云いつけどおり、木の深い穴に潜んでいたフィナ。

ついにはフィナ以外が死に絶えてしまい。
が、一匹たりとも逃しはしまいと、魔物らが念入りに森を見てまわり、とうとう穴に手を突っこんできて。

尖った爪先が触れそうになった、そのとき、そう、あの轟音が。

音がやんでから、外を覗いたところ、仲間も魔物も全滅。
死屍累々の真ん中に、剣を持った勇者が倒れていたわけだ。

電撃で起こして「なになになに！？俺、迷子になったんだけど！？」と号泣するのを、仲間のもとに導いてやってから、フィナはロイドにつきっきり。

あのとき、なにが起こったのかは分からないし、ロイドの記憶もない。
それでも、仲間の仇を討ってくれ、命を救ってくれた恩人と、フィナは見なして「私の命を懸けて守る！」と忠誠を誓った。

まあ、とはいえ、相手がヘタレ泣き虫勇者だから。

「もう、いい加減、盾を下げなさい！」と電撃。
「女の子を困らせるんじゃないわよ！」と電撃。

「私から逃げられると思うんじゃないわよ！」と電撃。
「仲間への感謝と謝罪を忘れないの！」と電撃。

日日、フィナなりに恩に報いているつもりでも、イジメているような形になったが。

といって、手のひらサイズの妖精のくりだす電撃なんて、静電気より、すこし強めくらい。
それしきで「この鬼悪魔魔物、魔王以上の非道！」とぎゃんぎゃんクレームする勇者も勇者。

その非難を真に受けず「ほんと助かるよ」「フィナのおかげで肩こりが治った」とむしろ仲間から頼りにされているし。

「勇者を尻に敷く、手のひらサイズのかかあ妖精」と漫画ファンの人気が高いキャラクターなわけだ。
俺にとっても愛しきキャラなれど、自分が扮するとなると・・・。

ブラック企業に洗脳され、社蓄根性が染みこんだ俺に、勇者をびしばし、びりびりと躾られるやら。